

月報

16号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 曜 編集★金 慶 浩
〒654 神戸市須磨区千歳町4丁目1-3
エパ―グリーンビル5F
TEL (078) 734-5989

植民地支配の精神構造

飯沼二郎

今まで、朝鮮に対する植民地支配は、憲兵政治とか土地調査事業とか産業増殖計画とか、主として制度的面について研究が進められ、精神的な面については充分、研究がなされてこなかったように思う。もちろん、同化政策についての旗田勲氏の研究などもあるが、しかし、同化政策の根底にあった天皇制の問題については、あまり目がついていなかったように思われる。

一八七二年、近代日本の出発に当って、政府は二つの法律を制定した。まず戸籍法によって、すべての日本人を各戸籍主（市町村内の御社の氏子とした。この二つの法律は一セットとなつて、すべての日本人を、政府の支配下におくことに成功した。そして政府は、日本中の神社を中央集権的に組み上げ、その頂上に、天皇の氏神を祭った伊

勢神宮をおくことによつて、すべての日本人を伊勢神宮のつまり現人神たる天皇の氏子とした（これが「天皇制」である）。御社を中核とする氏子集団が、氏子同士を強く団結させると同時に、氏子以外のものを強く排除したように、天皇を中核とする日本国民という氏子集団も、また、日本人同士を強く団結させると同時に、日本人以外の異民族を強く排除した。（それ故に天皇制の本質は「民族エゴイズム」だといふことができる）。それによつて、日本に国民的団結を急速に創り出すことに成功したが、そのための「犠牲の山羊」とされたのが朝鮮民族であった。

一九一〇年、朝鮮が日本の植民地となると同時に、朝鮮に日本の戸籍法が適用され、朝鮮人は天皇制の枠の中に組み込まれた。後の神社参拝強制は、ここに原因をもつ。もちろん日本語の強制が家庭内にも及ぶようになったように、同化政策は限界をもつたが、日本の戸籍法が朝鮮の戸籍制度とどのように接合され、どのように運用されたかを知ること、天皇制の渗透度を計る利深鉛として有効であろう。

次回 一七号は

『吾 在彦氏』

★

研究報告要旨

◆ 在日朝鮮人運動史研究関西部会(第七九回)例会

報告者 栗本 泰三 栗本 英氏

(86年4月13日)

テーマ 「在日」を生きること

在日朝鮮人は戦後このかた「在日」を否定すべきものとしてとりえ、帰国への思い入れを招いてすごしてきた。一九四五(五)年八月一五日の解放を迎え、津波のような帰国の足はやかたとなり、六十万人程が残り、一九五〇年(五)から五三年にかけての朝鮮動乱は、いやが上(じやがじや)に在日朝鮮人と祖国との結びつきを意識せしめにはおみながた。一九五九年十二月に開始された北朝鮮への帰国船は二年までに約八万の人を運んだが、それ(そ)も同年には約三千人と急激に少(ひ)んでいる。一九六五年に韓日条約が結ばれてからは在日朝鮮人の多数が「永住し」を還(かへ)ぶこととなり、祖国への思(おも)は世国訪問という名の一時帰国によって抑(おさ)えられ、こととなった。一九七二年七月、降(くだ)って来た(きた)ような南北共同声明は祖国統一への期待をふきたたけたが、まもなく潮は遠く引いてしまい、あとには韓国の独裁強化、北の個人崇拜、むしろ失望を拡大させた。ことあるごとに「帰国」によって活路を見たそうとした一世は次第に老人の域

となり、二世たちは自分の手で避けることのできない「在日」の現実(じやうじ)に打ちむかうこととなった。七〇年代以後の民族差別との闘いは「在日」をどう生きるのかとの模索であつたが、そうした現実をさうやくにして認めながらも、なお帰国の可能性を含む祖国とのつながりにこだわりをもつ層が少なくなつたというのも一方の事実である。思(おも)えば二世の中でも先輩格に登場した人々ではかなり感覚に差があるさうだ。前者を代表する朴奇南、李煥成、金賛訂といった人々をみると、いざい(いざい)も「バンチョツパリ(半日本人)」である自己を否定し、祖国へ全面的に傾斜(けいせつ)していくことによって朝鮮人としての再生を四(よ)つたのである。在日朝鮮人に烙印(れつおん)された自己のイメージを、「盲目的ナショナリズム」もあえて必要(きんやう)と(と)いう過程を経て、徐勝、徐俊植兄弟を正の典型(ていけい)(朴奇南)と対(たい)する悪敵(あくてき)が形成(けいせい)される。また「第三の道」を批判して現実合理主義は敗北主義(李煥成)との断定(だんてい)をなされたのであるが、しかしそれでは祖国に自らの望(ぞう)を託(たく)せることが果して創造的、主体的といえるかという疑問は払拭(はら拭)できない。むしろ「祖国との対応が主動的である」といふ、それはすぐれて創造的

となるだろう」(金右範)との認識の下に、居住外国人としての認識も生れてくる。いま「在日と生きる」というのは、日本社会で「共に生きる」とことという表現が多く使われるようになったが、自立をめざし、反差別の原理を普遍化させ、共に開くという心構えが「共生」と支えるものと思われる。

◆朝鮮民族運動史研究(第五五回)例会

報告者 梁 永厚氏

(86年3月19日)

テーマ 東洋とめぐる人々と

一八六〇年に、水雲・崔濟愚によって、外来の宗教および思想に反対する民族的な新興宗教としてつくられた、東洋、のちの天道教は、朝鮮の近代民族運動の発端であり、民衆がもつありゆる要素が投じられ、試されたルツボであり、民衆を基盤にしてオリジナルに育てようとした土着の近代思想であったと思う。

教祖、崔濟愚は、西学(キリスト教)に類似した異端の邪教とする支配階級によって、匪徒にぞつちあがり水斬刑をうけ、二代目教主の海月、崔時亨も処刑されたが、孫承熙、金演周、朴東浩とひきつかれ、これら教主と指導的宗教人たちは、

は、反侵略、反封建の甲午農民戦争、三・一独立運動などと民族文化、教育の昂揚運動に多くの足跡をのこしている。東学、天道教にかかわる書誌、『水雲行録』(原題は水雲文集)、孫承熙を中心にかかれて『天道教書』、金演周を中心にかかれて『侍天教歴史』、吳知承著の『東学史』などから、接所(地方の教堂)の所在地および接主(教堂の責任者)たちの人脈と、かれらの活動について報告を行った。

具体的には教祖とともに活動した教人たち、崔時亨とめぐる教人たちと甲午農民戦争の指導者、天道教の創団と内部試練(親日派・李承九らの出現)期の確執、三・一独立運動と天道教人、教団内部の派閥などを紹介した。吳知承の『東学史』の附録についている東学系の教団一覧は、東学と邪教とをきめつけていた朝鮮總督府の調査資料『朝鮮の類似宗教』から引かれており、東学の人脈とは縁のない、ただ教理と真似ただけのエセ宗教が含まれていることを明らかにした。東学、天道教の各時期の主流を占めた人物たちは、宗教一般に見られる絶対主義的権威を登場させることなく、民主主義的に各自の自己主張を交えており、全体としては試行錯誤

綴の連続であったといえるが、教理のなかの「人乃天」「後天開闢」ということばに代表されるユートピアの実現をめざすという点では自律的な活動をしていたといえる。

一九二〇年代後半からの、天道教の指導的教人たちのなかにおこる日帝への屈服については、ひきつづき調べていくつもりである。

★新着図書目録内

◆解放三聖史(一九四五—一九四八) 永南憲著 Hを 国書出版社 85.9. A5 ミニ二頁

◆韓国独立運動史 列強関係 韓国政治外交史学会編 Hを 平民社 85.11. A5. ミ四一頁

◆松屋途上国地域日本語文獻目録 アジア経済研究所編 東京 同所 86.1. B5. ミ三四頁

◆金日成將軍凱旋記 Hを 金載徳著 Hを 民主朝鮮社 86.1. B6 ミ三六頁

◆朝鮮近代史 姜在孝著 Hを 平民社 86.1. B6 ミ三六頁

◆韓国基督教殉教史 金光珠著 Hを 基督教文社 84.45 教会外 民族・健康誌著 Hを 大韓基督教出版社 81.45

◆大韓全教長老会百年史 編集委員会編 Hを 大韓全教長老会教育部 84.4. A5. 六四〇頁

◆日本帝國主義と朝鮮民族 安東直著 岩崎博士訳 東京 御茶の水書房 86.1. A5. 二九八頁

◆朝鮮統治官報 31.40巻 86.1. A4 Hを 亜細亞文化社

◆國家神道 村上重良著 85.7. B6 ミ三頁 東京 岩波書店

★次回案内

①在日朝鮮人運動史研究関西支部会(第八〇回)例会

日時 一九八六年五月二一日(月)午後二時

場所 青丘文庫

テーマ 在日朝鮮人の本名と通名の問題—歴史と現在について

報告者 Hニグホーフアー氏

②朝鮮民族運動史研究(第五七回)例会

日時 一九八六年五月一七日(土)午後三時

場所 青丘文庫

テーマ 天國鉄道建設及対南争などにみられる「種春事件」

後の朝・中民衆の連帯について

報告者 金 靜美氏